

令和 6 年 5 月 16 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13013

研究課題名（和文）動詞から受身標識への文法化における規則性：多言語調査とコーパス調査を通して

研究課題名（英文）Regularities in the Grammaticalization from Verbs to Passive Markers: Based on typological Survey and Corpus Study

研究代表者

夏 海燕 (XIA, Haiyan)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80727933

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、形態類型論的に異なる複数の言語（中国語、韓国語、日本語、モンゴル語、タイ語、ベトナム語、ロシア語、英語、スペイン語、ドイツ語）における動詞由来の受身標識及び形式上能動文の形を取りながら受身の意味を表す「語彙的受身動詞」に着眼し、受身標識へ文法化する本動詞及び語彙的受身動詞の基本義にフォーカスを当て、多様性を生み出す意味変化の共通性を明らかにする。方向性の間の関連性を論じるとともに、日本語における「てくる」の逆行態機能など、受身以外の言語現象もあわせて検討し、受動態の本質の解明に迫る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

語彙項目から受身標識へ文法化するプロセスにおける意味変化の方向性については、従来の研究は単一言語、あるいは、当該の言語に複数の受身標識を持つ場合も各受身標識を個別に検討するアプローチがほとんどである。類型論的な立場からの研究としてHaspelmath (1990) やHeine and Kuteva (2002) などが挙げられるが、質的にも量的にもまだ不十分である。本研究では、系統的、地域的、類型論的に見て多様な10の言語を対象に調査を行い、文法化の方向性を包括的に見直していくとともに、横と縦の関係を統一的な説明を与えようとする点で、受身研究や意味論研究の進展に寄与するものであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study, from a typological perspective, focuses on passive verbs and passive markers in Chinese, Korean, Japanese, Mongolian, Thai, Vietnamese, Russian, English, Spanish, and German. The research aims to: (1) identify the basic meaning of passive verbs and main verbs that grammaticalize into passive markers, thereby clarify the regularities in their semantic changes; and (2) examine related linguistic phenomena, such as the -te kuru construction as inverse voice in Japanese, to explore the motivation and mechanism of the passive voice.

研究分野：言語学、認知言語学、対照言語学

キーワード：動詞由来の受身標識 語彙的受身動詞 意味変化の規則性

1. 研究開始当初の背景

本研究は動詞から受身標識への文法化（自立性を持つ内容語が機能語になる変化（Traugott 1982, Sweetser 1988 など））における意味変化の規則性に着目し、研究の切り口とする。

Bybee, Perkins, and Pagliuca (1994) は「起点領域決定仮説 (Source determination)」(語彙項目から文法項目へと文法化する際、語彙項目の意味は文法化の進む軌道、及び文法化の結果としての文法項目の意味を決定する)を提示し、何を文法化の起点領域とするかは偶発的ではなく、一定の必然性と方向性が見られると主張している。受身標識にフォーカスをあてると、これまで、中国語の受身標識に関しては、GIVE > ANTICAUSATIVE > PASSIVE (授与動詞 > 使役文の被使役者マーカ > 受身文の動作主マーカ) という文法化の方向性に多くの研究者の関心が集中しており、文法化の現象について記述が蓄積されてきた(太田 1958, Hashimoto 1988, 徐丹 1992, 蒋绍愚 2002, 江蓝生 2000, 木村 2004, 2008 等)。また類型論的に、('BODY', NOUN) > REFLEXIVE > PASSIVE (Kemmer 1993, Faltz 1985, Heine 2000), SUFFER > PASSIVE (Haspelmath 1990), EAT > PASSIVE (Haspelmath 1990) などは、幾つか別の方向性を指摘している。さらに、Heine and Kuteva (2002) は類型論的な立場から先行研究をまとめ、EAT, SEE, GET, SUFFER, REFLEXIVE, FALL, ANTICAUSATIVE (reflexive maker), PERS-PRON などを受身標識の起点領域として挙げている。これらの先行研究をまとめると、以下のような問題点が存在する。

問題点 1: 考察対象となる言語の数が少ない。一部の方向性に関して、例えば、SEE > PASSIVE の場合、古代中国語とフランス語のデータのみであり、Heine and Kuteva (2002) が指摘したように、類型論的な傾向として見なせるか否かはより多くの言語で更なる検証が必要である。

問題点 2: 多くの方向性については、現象の指摘にとどまり、文法化の詳細に関する十分な検証がなされていない。EAT, SEE, SUFFER, FALL については、概念的な基礎が不明瞭であるという課題を残している(Heine and Kuteva 2002)。どのようなプロセスを辿って受身標識になったのか、その背後にあるメカニズムは何か、などの課題が解決すべき問題として残されている。

問題点 3: これまで指摘された幾つかの方向性に関しては、そのほとんどが個別にとりあげられ、方向性の間の関連性を論じる研究は見られなかった。同じ受身標識がゴールとなる複数の方向性に、そして受身標識として選ばれた本動詞に、何か関連性が見られるか検証が待たれる。特にこの点は受身文の本質の解明につながるはずである。

2. 研究の目的と研究の方法

本研究は共時的多言語調査と通時的コーパス調査の両アプローチによって多言語における動詞由来の受身標識及び語彙的受身動詞に関する上記の課題を解明したい。

問題 1 について、言語の系統を超えた 10 言語、中国語、韓国語、日本語、モンゴル語、タイ語、ベトナム語、ロシア語、英語、スペイン語、ドイツ語を対象に言語調査を行い、動詞から受身標

識への意味変化に見られる方向性を通言語的に確かめる。

問題2については、共時的通言語調査を通じて、諸言語において、どのような意味の動詞語彙が選択され受身標識に文法化するかを調査し、多様性を生み出す意味変化の共通性を明らかにする。これまで個別の言語で個別に扱われてきた現象に対し、統一的説明を与え、従来看過されてきた言語事実を新たに発掘し、受身標識の文法化について新たな知見を得る。さらに、中国語を中心に通時的言語データを集め、動詞から受身標識及び語彙的受身動詞への意味変化に見られる具体的なプロセスを確認するとともに受身標識と語彙的受身動詞の継続性・平行性を考察する。コーパスは北京大学漢語語言研究センターの古代中国語コーパスを使用する予定である。

問題3については、日本語における「てくる」の逆行態機能など、受身以外の言語現象もあわせて検討し、本研究で確認された方向性と今まで先行研究で指摘されてきた方向性をつき合わせて検討し、EAT, SEE, GET, REFLEXIVE など受身標識の起点領域に潜在する共通の特徴を見出す。

3. 研究成果

3.1 中国語の「遭遇動詞」と受身標識

中国語において、遭遇動詞と言われてきている動詞カテゴリーが受身標識へ文法化する傾向があると指摘されている。しかし、これまでの先行研究では、遭遇動詞の定義や範囲がはっきりされておらず、また遭遇動詞と動詞の遭遇義を区別せずに分析されることも問題点として挙げられる。本研究では、遭遇動詞の意味分析を行い、遭遇義はこれらの動詞の基本義ではなく、拡張義であること、そして、遭遇動詞の基本義の多くは<自己領域へのモノの移動>という意味が含まれることを明らかにした。また、「見」「被」「吃」「着」など中国語受身標識の通時的データの収集・分析を行い、<主語向けの移動>から<主語に向けての移動から受身へ>へ、という意味変化の方向性を検討した。

3.2 日本語の「てくる」

本研究では、受身との関連性を踏まえたうえで、「逆行態標識(inverse marker)」(Nariyama 2000、Shibatani 2003、2006、住田 2006、2011、古賀 2008、清水 2010、夏 2013 など)または「行為の方向づけ」(澤田 2009)とされている「てくる」の機能を取り上げて考察を行った。なぜこれらの「てくる」に不快感(被害性や嫌悪性)の意味が生じるのかについて議論し、「話者の予想外の行為」及び「話者領域の侵害」という2点が不快感の意味が生じる主な原因だと分析した。「てくる」における<話者領域向けの移動>から<不快な経験>へという意味拡張の方向性を明らかにし、受身との意味的類似性からより一般的な意味変化の方向性の解明を試みた。

3.3 通言語調査

2023年度は、主に共時的多言語調査に力を入れ、中国語、韓国語、日本語、モンゴル語、タイ語、ベトナム語、ロシア語、英語、スペイン語、ドイツ語を対象に、各言語における受身標識及び語彙的受身動詞について言語調査を行った。共時的通言語調査を通じて、上記の言語において、どのような意味の語彙が選択され受身標識に文法化するかを調査し、多様性を生み出す意味変化の共通性を明らかにした。

本研究で確認された方向性と今まで先行研究で指摘されてきた方向性をつき合わせて検討し、EAT, SEE, GET, REFLEXIVE など受身標識の起点領域に潜在する共通の特徴を見出した。方向性間の関連性について、本研究ではこれまで指摘されてきた EAT, SEE, GET さらに REFLEXIVE の上に新たに <動作主向けの移動 (AGENT-DIRECTED MOTION)> という上位カテゴリーを立て、方向性間における縦の構造を構築する。これまで個別の言語で個別に扱われてきた現象に対し、統一的説明を与え、従来看過されてきた言語事実を新たに発掘し、受身標識の文法化について新たな知見を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 夏海燕	4. 巻 2022年第3号(第136号)
2. 論文標題 漢語自反類動詞被動標記語法化原因探究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古漢語研究	6. 最初と最後の頁 12,23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19888/j.issn.1001-5442.2022.03.002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 夏海燕	4. 巻 第16号
2. 論文標題 「てくる」構文に見られる 不快感 について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知言語学論考	6. 最初と最後の頁 81,97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 夏海燕
2. 発表標題 <自己領域へのモノの移動>から<不快な経験をする>へ - 「てくる」構文に見られる 不快感 について-
3. 学会等名 オンライン・シンポジウム「マルチモダリティーと言語」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 夏海燕
2. 発表標題 从語言類型論学探究漢語自反類動詞由来被動標記的語法化
3. 学会等名 漢語史研究的材料、方法与学术史觀國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 夏海燕
2. 発表標題 日本語と中国語の直示動詞における話者領域と意味拡張の関連性
3. 学会等名 Prosody & Grammar Festa 5 (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関